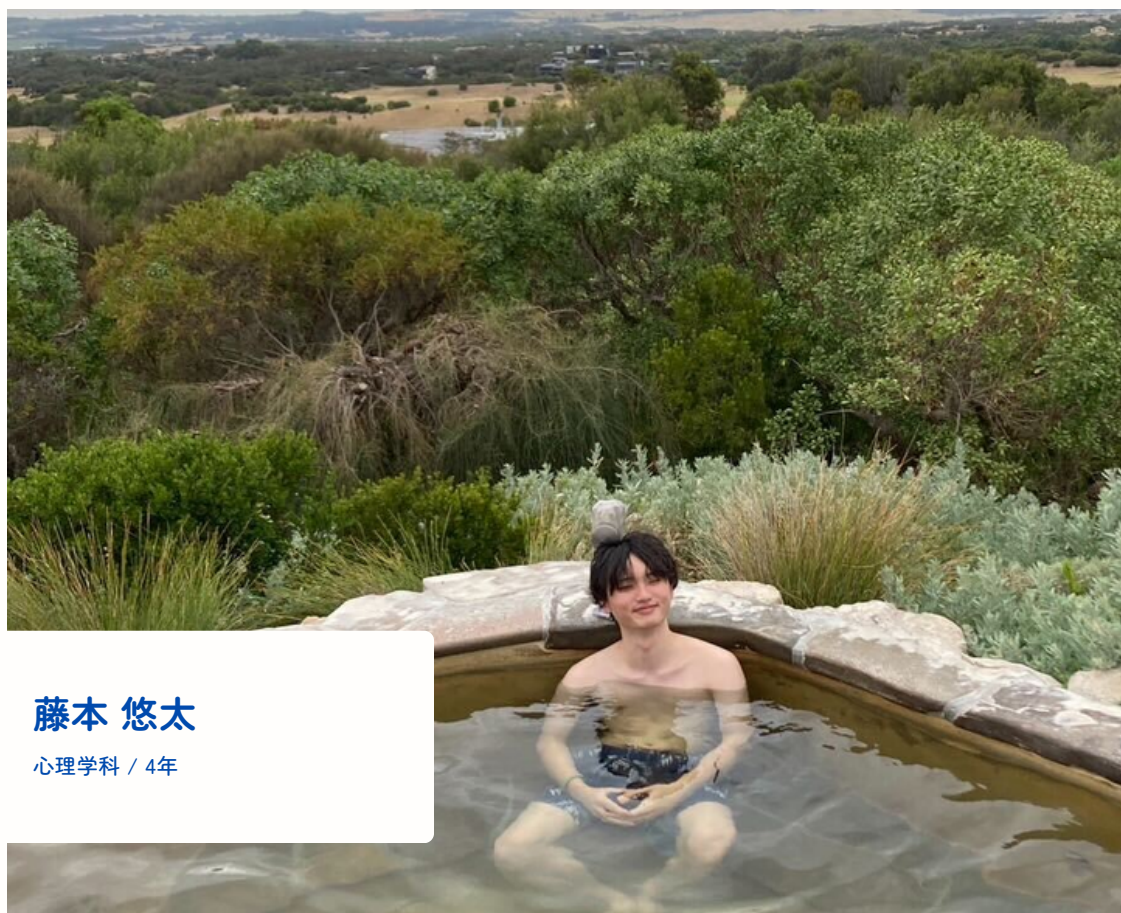


挑戦インタビュー

01

海外のサウナ・温泉

体験リサーチへ挑戦



藤本 悠太

心理学科 / 4年

サウナと温泉を通じて地域の未利用資源を活用することを目指し、キャリアデザインゼミメンバー三名でテントサウナ事業を展開している私は、海外の顧客視点に立って考える力を身につけるために、海外での体験リサーチに挑戦することになりました。

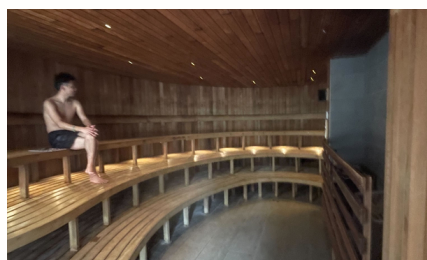
この挑戦の準備は、まずオーストラリアのサウナ・温泉施設をリサーチし、仮説を立てて検証するための場所やヒアリング内容をまとめることから始めました。また、現地の人々との意見交換のために、英語のプレゼン資料を作成し、質問内容を考えました。

実際に挑戦する中で最も大変だったのはコミュニケーションでした。日常会話はできても、深い話をするにはより

高度な英語スキルが必要だと痛感しました。

挑戦を通じて得たものは、海外の顧客視点に立って考える力です。今回リサーチ通して、旅前「中」後でいかにお客様に対して英語対応できるかが重要だと感じました。また、「ツアー型」のパッケージは、①ツアー掲載媒体との連携による認知拡大 ②交通・支払い等の面で参加のハードルを、二つの効果が期待でき、外国観光客を狙うには相性が良いと感じました。

卒業後、私は東京で就職しますが、今回学んだグローバルな視点を持って働きたいと考えています。また、今後、先輩達にも海外と日本の差を体感し、成長に繋げてもらえたら嬉しいです。



挑戦インタビュー

02

日本とオーストラリアの

スーパーの違いを調査



町本 一城

海洋生物科学科 / 4年

今回、私が挑戦したことは日本のスーパーマーケットとオーストラリアのスーパーマーケットの違いを見つけることを挑戦しました。なぜこの挑戦をしようと思ったかというと、私は卒業後、スーパーマーケットで就職する予定でオーストラリアのスーパーマーケットがどのような感じなのか、気になり視察をしようと思ったからです。

日本のスーパーマーケットは、お客様のことを考え、商品の配置や広々とした空間を作り、お買い物がしやすい環境をつくっています。海外のスーパーマーケットではどのような環境を作っているのか調査したいと思い、今回の挑戦を実施しました。

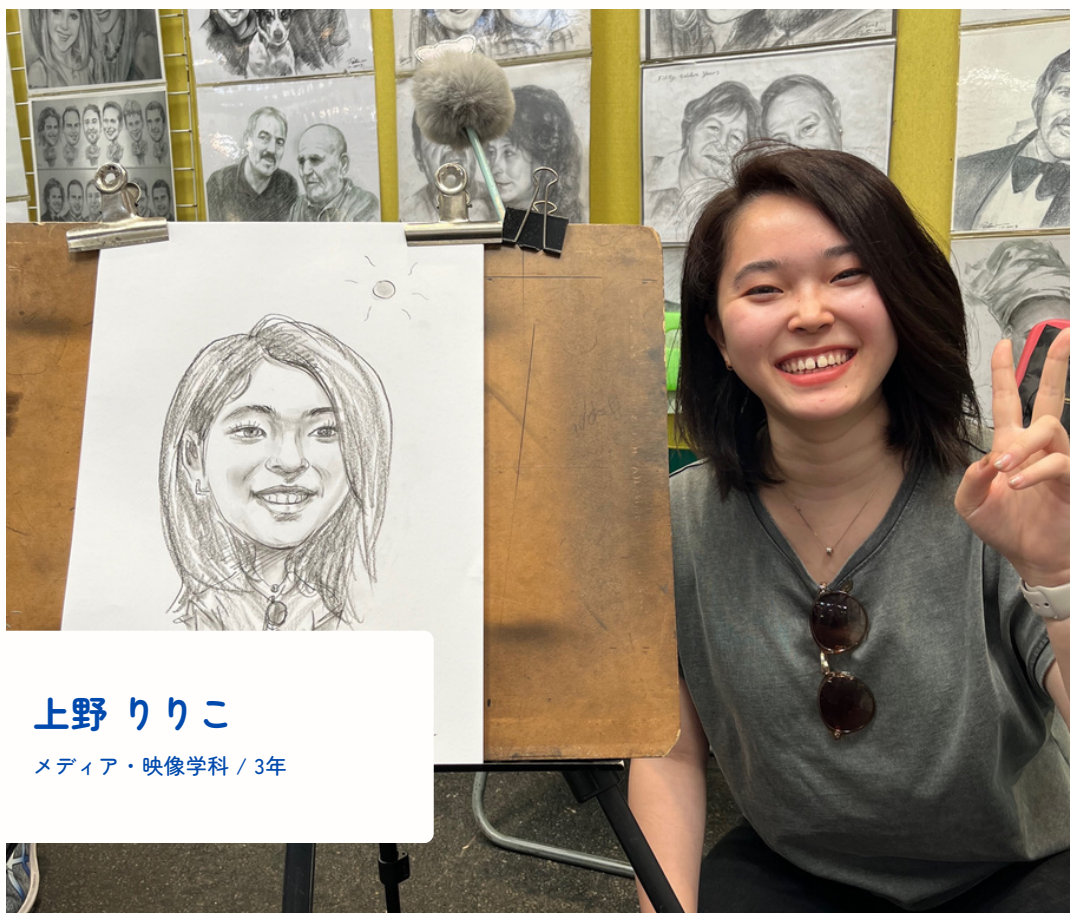
実際に、オーストラリアのスーパーマーケットを見て、多国籍のお客さんが多いという事に驚きました。支払いはカード決済が主流で、レジの中には現金ができないレジもあり、セルフレジが日本の2倍の数があり、盗難防止のために怪しい行動をした場合、その判断ですぐに、スタッフがくるようになっていたり、入り口が一つで一方通行であり、出口には警備員がたっており、とても最先端であり、犯罪が起きないような仕組みを作っている感じがありました。

今回の挑戦で沢山の日本にはないものを感じました。これを今後の就職で活かしていきたいと思います。



挑戦インタビュー

03



上野 りりこ

メディア・映像学科 / 3年

ファッションによって
本来の自分を引き出す一つの方法

今回私は、『外見から自信をつけ生活面、考え方、環境の変化を起こす』ためには何が必要か。海外と日本の比較をし、そのヒントを掴み取ることを目標に取り組みました。

日本では、近年生活習慣が乱れている人が多く、昔から「人に合わせる」「人の視線を気にする」という特徴があります。

そのため、自分の意思や考え方を見失い『本来の自分を見失っている』のではと感じました。

それを解決するためには、内面を見直す必要もありますが、それは日本人に適しておらず、『外見から自信をつける』ことで人の視線を気にせず思うがままに行動できる世の中になっていくのではと考えました。

研修で実際にショッピングモールや街中の人々の外見や立ち振る舞いを調査したところ、「文化」と「人との距離感」の違いが大きい事に気づきました。

主に距離感に関して、「人それぞれ」「興味関心」「会話が楽しい」と感じている人が大半で、人同士の壁がなかったです。それらの自信は服のデザインにも表れており、「自分の着たい服を着れる」デザインになっていました。

今回の研修で、ありのままになるには時間がかかり簡単ではないが、「行動力、観察力、表現力」なども身に付き、より自分に自信が付き軸ができる体感したため、後輩にそれを伝えていきたいと思えます。



挑戦インタビュー

04

人生を豊かにするコミュニケーション



田中 優衣

経済学科 / 3年

今回私が挑戦したことは、インタビューを通してオーストラリア人のコミュニケーションの形を調べるといふものです。

なぜこの挑戦をしようと思ったかというと、私の中で「コミュニケーションが上手であれば、人生が豊かになる」という仮説が立っているからです。

日本のコミュニケーションの形は閉鎖的であり、世界的に見ても特徴的であるとされています。

そこで、色々なコミュニケーションの形を知ること、より良いコミュニケーションとはどういったものなのかを調査したいと思い、今回の挑戦を実施しました。

調査の結果、オーストラリアの人は極めて外交的で、自己表現に優れていることが分かりました。

このようなコミュニケーションが生まれる理由としては、移民が多く、文化を受け入れる国民性であることが挙げられます。

本調査を通して驚きだったのが、相手に関心を持つことや身振り手振り等、日本人でも実践しやすいことが現地の人の間で重要視されていたことです。両国対称的であるのに、根本的なところは国関係なく実践しやすいというのが衝撃的でした。

今回得た学びは今後の授業や就職活動に活かし、更なる成長ができるよう努めて参ります。

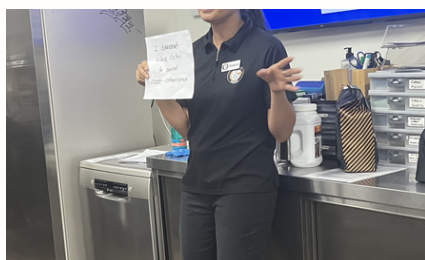
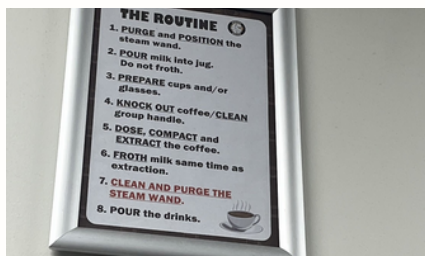


オーストラリアでバリスタ体験



和田 怜佳

生命栄養科学科 / 2年



私は、バリスタ体験コースを受講しました。この体験を選択した理由は、大きく二つあります。食品加工学という授業でコーヒー豆についての基礎知識を得たことと、以前メルボルンを訪れた際、オーストラリアのコーヒーの味わいについて調べたいと思ったことです。これらの理由から、オーストラリアのコーヒーについてもっと学び、自身でコーヒーを淹れられるようになりたいと思いました。

今回の体験をして得たものとして、大きく三つあります。一つ目は、事前学習としてコーヒー豆の生産地、種類やコーヒーマシンの使い方について学びました。二つ目は、コーヒーの作り方を学びました。十六種類のコーヒーの特徴や淹れ方を学習し、実際、淹れることができるようになりました。三つ目は、ミルクの温度調節の重要性を知りました。コーヒーの種類によってミルクの温度が決ま

っており、コーヒーの種類に応じた適正温度に合わせる事がとても難しくかつたのですが正しく調節し、クリーミーな泡を作る事ができました。

体験した時に大変だったことは、英語の壁にぶつかったことです。体験中、先生が指示している内容を理解できない時がありました。そのため、作業の遅れや混乱が生じました。英語で先生の指示を正確に理解することの難しさを痛感しました。

今回の体験から、おいしいコーヒーを作るコツについて学ぶことができました。今回、体験したことを活かして、日常生活で、おいしいコーヒーを作りたいと思います。また、英語力を上げる事が重要だと分かりました。今後は、リスニング学習に力を入れていきたいと思っています。

挑戦インタビュー

06



菅原 羽純

海洋生物科学科 / 2年

オーストラリアと日本の

水族館の違いを調査

私がこの調査をしようと思ったのは、国が違えば水族館で飼育されている生き物や展示方法が変わっているのではないかと思ったからです。

日本の水族館とオーストラリアの水族館の違いは、対象としている客層が違うことがわかりました。日本は大人向けであるのに対し、オーストラリアは子供向けになっていました。そのため、展示方法から違って、水槽の中に自分が入っているような展示がたくさんあったり、天然の植物をうえて自然界を再現した水槽もありました。それらの水槽は最低限のガラスで仕切られていたのて生き物と自分たちの距離が近く迫力がありました。

実際に挑戦してみて大変だったことは、やっぱり英語の壁が大きいことです。飼育員さんに質問しても自分の発音の問題や単語の読み間違い、自信のなさでうまく伝わってなくて、文章を見せて質問しました。英語の授業とは全くの別物ですごく苦戦しました。

今回の挑戦で、水族館の展示方法はつしかないと思いましたが、対象としている客層が違えば水族館の展示方法も変わってくるんだと知ることができました。そして、自分の英語力の低さを改めて実感しました。英語力を上げ、海外にまたチャレンジしたいと思いました。

